

## 重度重複障害児の可能性の分析に関する考察

「読み聞かせ」における受信・発信行動に注目して

奥山 敬

(東京都立光明学園)

KEY WORDS: 重複障害 発信行動 読み聞かせ

(目的) 学校教育の現場では、アセスメントを用いて児童生徒の可能性を探り、適切な学習課題を設定することが求められている。

筆者は 30 数年間、特に重度重複障害の児童生徒の教育実践に携わる中でアセスメント活用の方策を探ってきたものの、機能的に活用することには至らずにいる。その理由は、児童生徒の可能性、特に精神的な世界の広がりや深さを同定することに困難さを感じていることにある。

今は、まず児童生徒が直面していると思われる困難さを分析して、それらの困難さを軽減する手だてを探りながら適切な学習課題を設定している。

筆者は今まで重度重複障害の児童生徒の発信を支える支援を探る中で、彼らが能動的に情報にアクセスすることが難しいことから、その年代の児童生徒が触れると思われる情報を含めた多様な情報を提示し、それらの情報に注意を向ける様子に着目することによって適切な学習課題を設定する試行を重ねてきた。

その中で特に「読み聞かせ」の学習を通して児童生徒の興味関心を探り、学習課題を設定し、彼らの主体的な学習者としての可能性を探ることを考察することとした。

(方法) 石川 (2006) らは、重複障害のある児童生徒の評価について、「既存の発達検査や単一障害を想定している検査によっては、重複障害のある子どもは、能力を著しく低く測定されてしまう。子どもにとってなじみのある状況で安心できる人と共に、その重複障害がもたらす影響について理解のある人が丁寧に観察し、実際に関わる中から継続的に行う評価が最も信頼性が高い」と提案している。

これは、検査者の働きかけ(発信)に対して「見えにくいために見つけにくい」「運動の制約があり機能的には運動を起こせない」等の感覚や運動の制約があることを配慮することが容易ではないことがあると考える。

一方、話し方、見せ方、予告のしかた等、児童生徒の感覚や運動の制約の状態に配慮し、想定される困難さに合わせた支援(「受信」しやすい工夫)をする中では、ひとりひとりの外見から見て想定する障害の重さとは異なった興味や関心、感情の表出、精神的な世界の深さの存在を垣間見るような「発信」を、目の動き、緊張状態の変化(四肢の動き)、発声等を通して読み取れることがある。このような「発信」を「わかっていることを伝える行動」として捉え、そのような「発信」の意欲を維持できるような働きかけを日々工夫することを通して、学習課題を修正・発展している教師は少なくない。

今回は、同年代の児童生徒が触れると思われる物語等の教材の読み聞かせを通して、興味関心や精神的な世界を推察して、重度重複障害の児童生徒の可能性を分析することについて考察する。

(結果) 読み聞かせの学習の教材として、重度重複障害児に対しては学齢以前の幼児のための絵本が選択されることが少なくない。しかし、彼らが年齢相応の情報にも注意を向ける場面を見てきた筆者は、肢体不自由特別支援学校(小学部高学年、自立活動を主とする課程)において「ながいはなし、みじかいはなし」という学習に取り組んだ。「長い

話」(年齢相応の読み聞かせ教材)と「短い話」(幼児向け)を二人の教員が順番に読み聞かせし、児童がお話に注意を向ける様子を ST が観察するとともに、読み聞かせの終了後にどちらの話が面白かったか、児童に聴覚的スキニングで選択してもらうという構成の学習に取り組んできた。その中で、多くの児童が学齢相応の読み聞かせにも注意を向けることを見てきた。

昨年度からは個別指導の場面で読み聞かせに取り組む中で、今まであまり見られなかった注意の向け方(表情の変化、四肢の動き等)を見せた児童生徒が複数いた。物語の題名を家庭で保護者が口にするると大きな反応(発信)があったと後日伝えられることがあった。

物語の山場になると、思わず声を出す児童生徒もいた。個別指導では、児童生徒の発信をより細かく捉えながら読み聞かせをすることができるという大きな利点を感じている。

(考察) 年齢相応の読み聞かせ教材に対する児童生徒の「発信」は想定した以上に時には力強く、多様なものであった。

「年齢相応の読み聞かせ教材」という取り組みを支えているエピソードがある。ひとつは、学校在籍時にはコミュニケーションの確保が難しく、卒業後にパソコン等の手段でコミュニケーションを確保した方たちの「よくわからないと思われていたことが残念だった」というメッセージである。もうひとつは、津守真先生が愛育養護学校で機能的なコミュニケーションが難しい児童に対して聖書の読み聞かせをしていたというエピソードである。

重度重複障害の児童生徒は能動的に周囲の情報にアクセスすることが難しいために、学校では教員や支援者が見せたり説明する情報がすべてであるといっても過言ではない。

機能的なコミュニケーションが難しいからといって、乳幼児の発達を支えるような情報だけ用意すればよいのだろうか。「わかっていることを機能的に伝えることが難しい」状況におかれている可能性を常に鑑み、地域社会の一員として活躍するための必要な情報を工夫して提示し、その時の児童生徒の発信の様相を分析することが必要ではないだろうか。

提示した情報に対して注意を向ける発信行動を教員が受け止めたときには、さらに児童生徒が情報をよりわかりやすくする工夫を重ねるとともに、能動的にはアクセスできない他の情報を検討して提示することが必要だと考えている。物語教材に注意を向けた場合にも、その内容でわかりにくいことが多々あると推察している。そこで、難しそうな語句について説明しながら読み聞かせを行っている。

(文献) 重複障害のある児童生徒のための教育課程の構築に関する実際研究 石川政孝ら 国立特別支援教育総合研究所課題別研究 B-202 114 (2006) 重度重複障害児の発信の支援に関する考察 奥山敬 日本特殊教育学会第 54 回大会発表論文集 新潟市(2016) (OKUYAMA Takashi)